

# 『好色一代男』

——一代記的性格——

小 森 啓 助

『好色一代男』は、一応、世之介という男の一生を描いた長編の形をなしている。しかし、すでに常識となつていのように、世之介は必ずしも主人公として一貫した、個性のある人物ではない。「世之介」とは浮世之介、すなわち浮世男・好色男・当世男くらしいの意味であるといわれる。早く阿部次郎氏は、「好色一代男」おぼえがき（『徳川時代の芸術と社会』所収）において、この作品に長編小説としての萌芽をいくつか認めながらも、結局は「短篇小説の花輪」（ノエルレンクランツ）とみななければならないと規定した。そして、世之介を一人の人間とみるには都合の悪い点をいくつか指摘されている。

『一代男』を、巻四または巻五までとそれ以後とに二分してとら

『好色一代男』

えることも、また常識化されている。前半が世之介を中心にした一代記的色彩が比較的濃厚なのに対して、後半は名妓列伝ふうなところが多いといわれる。吉江久弥氏は、「篇次に表れた俳諧的影響」・「創作意図」・「古典文学の影響」・「作品各章間の連続性」の四つの面から、巻四までの前半の「緊密性」に対して、巻五以下後半の「乱調」を指摘した（『西鶴研究』復刊第四集「好色一代男」成立攷）。これらをうけて堤精二氏は、目録の書き方も前半と後半で様式を異にする点に着目し、前半の一代記的性格と後半の評判記的性格を認めようとしている（『国語と国文学』昭和29年7月号「好色一代男」と「諸艶大鑑」——その成立をめぐる試論——）。ただし堤氏は、巻五までを前半、巻六以下を後半とする。同氏はさらに、後半が一代記として矛盾する章や年立の無意味な章を含んでいる事実をあげ、前半と後半の成立事情が異なるのではないかと推論す

る。そして、後半に「諸艶大鑑」と近似した題材や趣向のものが多いことから、作者が巻五までを書き終わった時、すでに草稿として手許にあった評判記的な短編群の中から、『一代男』の長編的構想にあまり支障のないものを選び、脇役に世之介をはじめ込んで後半を作りあげたものであろうと推定されている。草稿の残部が『諸艶大鑑』に使用されたのである。

『一代男』の性格が前・後半で相違していることに気づく以上、このようになぜそうなったのかという成立の事情を考えてみたくなるのは自然なことであって、多くの論議を呼んで尽きるころがない。上記吉江久弥氏の論考も、標題の示すごとく、成立に関する考察が中心であり、谷脇理史氏の「好色一代男」の成立過程（『近世文芸』第九号）などもそうである。ともに堤氏と同じく、『一代男』の原型である草稿の存在を想定するものであるが、谷脇氏は吉江氏や堤氏と違って、前半についてもそれが考えられるという。さらに近くは、島田勇雄氏の「好色一代男」における遊女品定め文（『文学』73年1〜3月号）が発表されている。同氏も『一代男』が書きおろしの作品ではなく、いろいろの意図で書かれた各種の「転合書」がまず成立していて、それらを適当に改稿・編集したものが出版されたのであるとする。その転合書の一つとして、後半の章に点在する遊女品定めの記事が考えられている。

これらの諸説で精密に論じられているところからすれば、『一代男』に、何らかの草稿あるいは原型と考えられるものが存在していた可能性が認められねばならないであろう。特に後半においてそのである。それが具体的にどのような経過で『好色一代男』という一部に仕立て上げられたものか、私自身は推定の根拠をもたない。諸氏の説に対して私見を加える用意もない。しかし、このようにさまざまな推定説が行われているのも、さきにいったように、前半と後半の著しい不均衡が誰の眼にも明らかであることが、その一つの契機となっているものと思われる。成立の事情がどうであろうとも、この不均衡は認めないわけにはいかない。それに関連して、『一代男』を世之介を主人公とした一篇の作品としてみると、多くの破綻があることを否定し得ないのも、また一読して明らかな事実であろう。野間光辰氏は、『定本西鶴全集』（第一巻）の解説で、作者の制作動機として次の三点をあげていられる。第一は、新しい遊女評判記・諸分秘伝書を志したこと、第二は、主人公の遍歴を通じて、一人の人間が野暮から粹に成長する色道修行の過程を示そうとしたこと、第三は、風俗・世相の変遷を記述しようとしたこと、である。そして氏は、このようなあまりにも多くの抱負と計画をこの一作において実現しようとしたために、作者の小説的技術の未熟さもあって、本書が長編としては失敗作に終わったとすることがで

さるといわれる。まさにそのとおりであろう。

したがって本書は、例えば右に述べられている三つの制作動機を想定し、ある場合は第一の点を主に、ある場合は第二または第三の点を主に読み進んでゆけばよいのかもしれない。それが最も作者の意図に沿った読み方であるとも考えられる。無理に長編小説の枠をはめて解釈する必要はあるまい。作者の話しかけに従い、跋文の「菜口鼻」にならって「大笑ひ」して楽しめばそれでよいのである。下手な談義はそれこそ野暮の骨頂といわれるに違いない。しかしながら一方、長編構成の失敗点を指摘し、それと引きかえに場合場合に応じた恣意的な読み方をするのみでは、作者に対して相済まない気持がしてならない。阿部次郎氏がいったように、ある程度は長編としての枠組みもできていれば、伏線も設けられている。局面の転換にも留意されている。特に前半部は、世之介の経歴に伴った一つの流れがみられる。

この流れは、前半に現れるのみで、後半では、最後の一章くらいを除いて、ほとんど消滅してしまったのであろうか。どうもそうばかりとは思われない。仮にも一篇の作品として発表された『好色一代男』である。前半の遍歴・遺産相続をうけて世之介の後半生が展開するのだけならば、意味をなさないだろう。でき上った結果のみを批判するのではなく、少なくとも一つの作品として発表しようとし

## 『好色一代男』

た作者の良心くらいは認めねばならないように思う。たしかに後半は、いわれるとおり名妓列伝的なものを中心になっていて、世之介の存在は影が薄い。否定のしようもないことである。作者が得意とする方面の記述にみずから溺れて、世之介のことはついでにしろになってしまったかもしれない。殊に前述したようなこの作品の成立過程を肯定すれば、後半は初め、世之介とは無関係に草稿ができていたことになる。上梓の際の手直しにあたって、もともと長編構成能力を云々される西鶴なのだから、予期したほどの成果はあがらなかったとしなければならぬ。十分な時間的余裕もなかったであろう。もし完全に手直しされて、前半と渾然一体のものとなっていたとすれば、そもそもそのような成立論が行われるはずもなかった。前半に引き続いたかたちで後半が語られていなければならぬと思ってみても、それはあるいは一種のないものねだりに陥る恐れがあるかもしれない。しかし、そういうことも十分考慮に入れた上で、なおかつ、後半の部分にも一貫して、世之介一代記的性格を作者は賦与したと考える余地がありはしないかと思つたのが、この小稿を書くとした動機である。

ただし、ここで後半における一代記的性格と称するのは、遺産をうけついで世之介が大尽遊びに堪能したあげく、女護の島へ出帆する後半全体の大まかな構想だけをさすのではない。主人公としての

地位を相手の遊女に譲ってしまったといわれる世之介ではあるけれども、実はそうではなくて、後半においてもまだその地位を保ち続けているとみたいのである。そしてそれは、前半において一応成就したかみえる世之介の好色修行が、実際にはまだ完成しないで後半の世界につながってゆくことである。多少のこじつけは免れぬかもしれないが、以下こういう観点に立って『一代男』を読み直してみたいと思う。もっともその場合、世之介を必ずしも一個人と考えるのではない。「浮世之介」であり、「好色男」であってよいが、便宜上これを「世之介」と称しておくこととする。

## 二

まず順序として前半の考察から始めるが、『一代男』八巻五十四章のうち、どこまでを前半とするかは諸説一定していない。前節でも断つたように、ある人は巻四までとし、ある人は巻五を含むものとする。巻五は中間的な性格があるからどちらともいえようが、ここでは極く機械的に、父親が死んで遺産を継承する巻四の終わりまでを、とりあえず前半としておく。七歳から書き始められる世之介の前半生の部分である。それはさらに、「まだ差別有るべきとも思はず、世の人雪の梅をまつがごとし。」とある十歳の頃までと、その後実践行動が始まってから勘当を言い渡される十九歳までと、そ

れからあとの三十四歳までとの三期に分けることもできようが、第二期と第三期とは、世之介の好色修行に関するかぎり、あまり大きな違いがあるように思えない。年齢の増加がさほど世之介の行状に反映していないうらみもある。一つ一つの行状を取り出してみれば、年の割にいかにも不自然だと思われることも多い。しかし、それらの点はまず不問に付しよう。また、そういう欠陥はあっても、

この前半部は、大体において、一代記的性格が貫かれていることを誰しも認めるのであるから、重ねてここにそれを証明する必要もない。それよりも、世之介は、この二十数年にわたるいわゆる好色修行で、一体何を修行したのかということ、この前半部でみてみたい。後半生に入るまでに得た修行の成果である。言いかえれば、後半で世之介が大尽となるために取得しておかねばならない条件である。

その第一は、地方の遊里や下級遊女が、いかに下劣なものであるかということに対する認識であったと思う。もっとも、世之介の足跡は全国津々浦々に及び、遍歴した相手も種々雑多である。遊里なんかではない場所や、遊女の名に値しない下層の売女の類が大部分を占める。男色関係その他二三を除いては、『色道大鏡』巻十四にいう「雑女」なのであるが、本稿では以下時として、便宜的に右のような名称をもって、これらすべてを代表させ一括する場合もある

ことを断っておく。前半では、そういう場所や女どもなどの風俗紹介が作者の目的の一つでもあっただろうが、そこで世之介が見聞し体験したことは、一様にといいよほどの田舎くささ、薄汚なさであった。章の順を追って、その具体的事実をみてゆくこととする。

巻一の第五章で、世之介は初めて遊里を訪れる。伏見撞木町、客筋はあまり高級とはいえない。揚った所も「ちいさき釣囃子」の局で、「唐紙の竜田川も紅葉ちりぢりにやぶれて、煙もいぶせきすひがらの捨所もなく」というわびしさである。もっとも世之介自身は、初めての経験だから気もそぞろにやっていた。何もかも珍しいばかりで、あまり気にもとめていないらしい。したがって、ここでたまたま出会った女がひどく気に入ることもなるが、そのことは後の問題とする。ともかく、初めて遊んだのはこういう場所であった。

続く第六章では、はじめに須磨の塩屋で海女を呼んでみる。しかし、「髪に指櫛もなく、白に何塗る事もしらず、袖ちいさく裾みじかく、わけもなう磯くさく」で、不愉快なばかり、「延齢丹などにて胸おさへ」、行平の故事をしのんでうんざりする。翌日兵庫まで引き返したが、港町の旅人相手の遊女に身を汚すよりはと、風呂屋にゆく。湯女の有様はどうであったか。

### 『好色一代男』

風義は、ひとつきる物つまだかに、白帯こころまま引きしめ、やれたらば親かたのそん、久三挑灯ともしや、といふかた手に草履取出し、くぐり戸出るより調子高にはうばいを誘り、朝夕の汁がうすいの、はさみをくれる筈ちやがたるるかしらぬと、ひとつとして聞くべき事にもあらず。座敷に入りざまに、置綿を壁につけ、立ちながらあんどんまはして、すこし小闇き中程に坐して、雁首火になる程はなさず、をりをりあくびして、用捨もなく小便に立ち、障子引きたつるさまも物あらく、からだを横に置きながら屏風へだてたるかたへ咄しを仕懸け、身もだへして蚤をさがし、夜半八つの鐘のせんさく、我がこころにそまぬ事は返事もせず、そこそこにあしらひ、鼻紙も人のつかひ、其後駢のみ。どこやらひえたるすねを人にもたせ、たよく、くむよと寝言まじりに、いかに事欠けなればとて、いつの程より、かく物毎をさもしくなしぬ。

引用が長かったが、一章の約三分の一を費して酷評されている個所の全文である。蛇足を加える必要はない。

八坂あたりの茶屋が舞台の次章巻一の七にも、同様の風俗描写がみられる。前章ほどではないけれども、座敷は畳が「なにとなくうちしめりて」いたりして「心知よからず」、料理も「お定り」のもの、女も「わけしりだて」で変にしどけなく、いやらしい。目の前

で浜焼きをさせるかと思えば、盃は「おさへまする」という状態であった。

これらはまだ修行の序の口である。今後世之介は、次々と似たような経験を積み、見聞を広めてゆくのであるが、その間におのずからこういつた下賤なものからの教訓を得て、漸次審美眼が養われてゆく過程にも注意しておかねばならない。右の巻一においても、撞木町の初体験の時にくらべると、あと第二章では様子が少し違ってきている。それはあながち場所や相手の差のみによるものではないだろう。不快なものを不快とし、醜いものを醜いとする批判力が芽ばえていくように思う。批判ができるようになると、同時にまた、より美しいもの、高級なものへの憧れも自然に生じてくる。兵庫の湯女のとくに、これと比較して、江戸で名をあげた湯女のことが付記されているのも、その一証であるといえよう。いうまでもなく、修行の成果は、単に下劣さを認識するのみではない。それに伴う批判から、さらに本物への憧憬が生まれ、後半の大辰生活へとつながってゆくのである。

巻二以下は、途中の勘当をはさんで、世之介の遍歴がいよいよ本格化する。行動範囲も広くなり、作者得意の風俗描写が延々と続く。諸国同じような例が多くて煩わしいが、主要個所のみを指摘しておく。

巻二の四は奈良である。所自慢の人にいわせると、「おそらくよねの風俗にはちぬ」木辻・鳴川であるけれども、「下り舟にのる心知」の気易さだけがとりえであることが、もはや世之介にも一目でわかるくらいだ。巻二の五で、江尻の姉妹の遊女を連れ出し、宿場女郎の内幕話を聞くのも一つの勉強であった。巻二の七では、大坂の「くら者、月懸りの手かけ者、出合ひ女」などとも交わって、その内情の「さもしさ」を「わけしる程うるさし」と思う条がある。

巻三では、第二章に下関稲荷町が紹介される。「女郎は上方のしなしあって取乱さず」、宿のもてなしもよい。「盃のやりとりも」「いまだ古風やめず」、膳の出し方も格式どおりだが、「是を馳走」と思っているところなど、かえて田舎じみでいて、しまいはやはりうるさくなってくる。第五章、越後の寺泊もこれによく似ている。

「いかに北国のはてなればとて、あなどりたまふな。」ということではあったが、服装も化粧も歩きぶりさえも、「いやながら外に何もなければ」と辛抱するだけのことである。膳が出て女郎は箸をとらない。「上方の事誰がいうて聞かしけるぞ、しをらしき」と思った矢先に、灯芯をかきたてて指についた油を、すぐ小鬢になすりつける。「笑はれもせず、腹おしなで居る」はかなかった。次の第六章では、酒田に来て、第三章に出ている大坂の「蓮葉女」に類

した「しやく」や、土地で「干瓢」と呼ばれる女どもをみる。これまた、もちろん最低の部類である。「死なれぬ命のつれなくて、さりとてあさましき事共、聞くになほ不便なる世や。」という感想が洩らされるが、このきびしい現実をじっくり見据える世之介とは思われない。おそらくは、顔をそむけばかりに北辺の地をあとにしたのではないか。彼の修行はそういう性質のものであったと思う。

好色修行の成果の第一にあげた下級遊女の実態に関する世之介の認識は、以上、巻三までですでに十分すぎるくらいに獲得されているといえよう。下級といっても、その中では比較的高級の部に属する伏見・奈良・下関などもある。これらは『色道大鏡』巻十二・十三「遊廓図」二十五個所のうちにも入っている。特に下関は、「屋造り田舎めかず、郭内爽かにして閑潔なり。傾城の風儀よき事、西国第一なり。」などがある。しかし、そういう所でも、少し極端に言えば、最下級の場所と、実情はさまで変らないのではないか。後家・人妻など、これも『色道大鏡』では「雑女」の部類に入るが、それら素人女をも含めて、要するに程度の差である。世之介はまだ知らないけれど、一流の地とは質が違う。上にも述べたように、各地の遊び場所を遍歴して、つぶさにその実情を知り、鑑識力をも養い得た世之介が、未知の一流地への憧憬を抱くに至るのは、むしろ当然の経路であったといわねばならない。巻三の一では、男山の麓

### 【好色一代男】

で逸楽三昧の暮しをしていた隠居に連れられて京の周旋屋へ行き、「万の自由、みやこなれや都。」と驚歎する。巻三の五、寺泊の条では意外にもて、江戸の高雄太夫のことや京島原の出口の風景をしのぶ。その他、見るもの聞くもの何かにつけて上方を想起するところが、巻三あたりには特に多い。それはまた、必ずしも巻三に限ったことではなく、少し注意して読めば、勘当前後の放浪生活全般を通じて、世之介の心はたえず何らかのあたりで都との結びつきを失っていないことに、容易に気づくであろう。

こういう伏線を設けておいて、巻四の六、前半の終わり近くに、作者は、加賀で知りあった夢山という大尽のお供をさせて、世之介を京へ連れ戻す。この前後には、かたわら、西鶴の博識ぶりがしきりに披露されるが、これも世之介にとっては、付随的に得た修行の成果であったといえよう。京に帰った世之介は、御所方の女臈の物好きな遊山風景をみて、どきもをぬかれる。そして夢山に従い、初めて島原へとくり出す。しかしこの時は、太鼓女郎にさえ振られる始末で、「この口惜しさ、人に買うてもららうて遊ぶべき所にあらす。おれも一度は、中々是では果てじとぞおもふ」のであった。

前半最終章、巻四の七で、はからずも父親が死んで勘当が許され、遺産を相続して、「大大大尽」の念願が一举に成就し、この口惜しさは解消することになる。遊興に軍資金が必要なのはいうまで

もない。「人に買つてもらうて遊ぶべき所にあらず」と気がつくのも、修行の成果といえはいえるが、あまりに自明のことであつて、とやかく問題にすることはなからう。ただここで一つの疑問は、資金さえ整えば「大大大尽」となり得る資格を、世之介はすでに身につけていたのか、ということである。もっとも、修行の成果としては、次節に述べる精神面のことがある。だが、本節でみてきた下劣さの認識が、いわゆる「雑女」を主とした巻四までの遍歴で十分達せられたとすると、後半との間に少し飛躍がありすぎるように思う。

この疑問に対する作者の解答が巻五の第二章以下であらう。巻五は、吉野大夫の第一章と若衆に関する第四章とを除いて、世之介の足は再び地方に伸びる。行先は、大津・室津・堺・博多・宮島といった、前出の伏見や奈良や下関とはほ同格の場所である。その意味では新味がないのであるが、あらためてここに上げた作者の意図は、単なる地方遊廓紹介の補遺ではあるまい。一代記的構想に視点をおくならば、それは、世之介に大尽となるための仕上げの場を提供するものであつたとみられよう。資金ができたからといって、二流・三流をとばし、一ぺんに最上層に転ずるわけにはいかない。もちろん世之介は、巻五で、第一章を除いても、すでに大尽の生活を経験していることが知られるが、そのかたわら、なお踏査してお

かねばならない場所が残っていたのである。しかし、それらの場所における実情はどうであつたか。殊勝な女も稀にないではなかつたが、どこの廓でも目につくことは、やはり土地の風儀の悪さであり、女郎の程度の低さであつた。巻四までの各地とあまり変わるころはない。堺では「旅の悲しさをよく御合点あそばして、京の女郎さまの御気に入るやうにあそばせ」と太鼓持から諭され、「いかに此浦のしほを踏んで、老いての咄しにもとおもふぞ。」と答え、これをうけて、章の後半の記述には、新町・島原への憧憬・志向が著しい。

そして最後に第七章で、「遠国の傾城のかつてをかしからぬこりはてて」大坂に帰ってくる。相方は新町の天神であつたから、まずは準一流格であつたはずだが、部屋を見渡して、はや期待外れであつたことがわかる。おまけに女からはおまじま至極な場面を見舞われる。後に出てくる吉原の吉田太夫（巻六の六）とは比較すべくもない。地方の代表的な遊廓を一通り紹介し、最後にこの話をもつてきたことで、巻五を修行仕上げの時期とする理由は説明されると思ふ。けれども、せっかく足を伸ばしてはみたが、世之介にとつて、新しく得た成果はほとんど何もなかつた。ただ、長年の遍歴の間にも洩れた所を念のためまわつてみて、従来の成果を再確認し得たことをもつて、成果としなければならない。最終章はそのとどめであ

る。新町の天神としては少しひどすぎるであろうが、これまで京都や大坂の遊女については触れるところがなかったその空白をこの一人で埋めたものと解せられる。一流地であっても、天神以下では所詮質が違つことをいうために、わざとこういう例を最後においたのかもかもしれない。大層生活を本格的に始めさせるまでの一つの準備がここに完了したといつてよい。

### 三

遍歴によって得た体験で、高級の太夫を相手とするのでなければ眞の遊びでないことは会得できたとしても、肝心なのは、その太夫遊びに必要な粹人としての心の準備であろう。修行の成果の第二にあげねばならないのはこの点である。

もう一度世之介の若い頃に戻ってみる。巻一の五、初めて遊びに行った伏見撞木町で見かけたのは、所がらにも似ぬ「やさしき女」であった。ことは数も少なく、「見られたき風情にもあらず」と思われる、まだ汚れに染まぬかにみえたその女に、世之介は初見からすっかり参つてしまい、「此君は何としかかるしなくだりたる宿に置きけるぞ。」と不審がる。そして「いかなるしるべにて此所にはましますぞ。殊更うき勤め、さぞ。」と話しかけ、身の上話を聞こうとする。女は山科に住む浪人の娘であったことがあとでわか

### 【好色一代男】

る。その身分を隠すために世之介を実家に寄せつけまいとした心根を感じ、身請けして親許に帰してやったくらいだから、たしかに他の女と違ったところがあつたのだらう。それはある程度認められる。しかし、いきなり身許調査を開始し、うき勤めの身の上に同情を寄せて家まで訪ねてゆくのは、全く初心者らしい野暮な態度を露呈している。巻二の一でも、飛子に対して身の上話を求める。一般的にいって、こういう心理は、個人的な愛情の芽ばえを意味するものであらう。当然のことながら、世之介はまだ「遊び」に來たといふことがわかつていない。局女郎である相手と自分を、一対一の関係においてみる。だが一面、それだけ純情さをもっていた。初心と野暮は、裏をかえせば、一個の人間としての誠実さに通じるといふべきである。親許に帰してやっからも、なお見捨てずに長く通つたことになっている。修行を始めた頃の世之介にはそういう人間らしさがあつた。今後の世之介は、野間光辰氏のいう野暮から粹へと成長する過程で、このいわゆる人間らしさを段々と捨ててゆかねばならない。そうすることにより、はじめて野暮から脱却して粹人の資格を得ることになる。前節と同様、章の順番に主要箇所を検討してみよう。

巻二の二は、「後家程心にしたがふものはなき」と聞いて、ひそかに興味を抱いていた世之介が、さる未亡人に誘惑される話であ

り、次の巻二の三は、人妻に言い寄ったが目的を果さなかった話である。ともに前記の「雑女」に属する女性であって、粹を志す者のかかりあうべき相手ではない。前者はすえ膳であったが、契りを重ねているうちに子供ができて捨子しなければならぬし、後者は、うまく計られて恥をかき。只ほど高いものはないことを知る貴重な体験でもあっただろう。巻二の五、江戸へ下る途中、江尻で脱線して連れ出した姉妹の遊女からは、また身の上話を聞くけれども、ただ「をかし」と思うだけである。路銀に窮すると、二人の女も置き去りにされてしまう。修行の成果はすでに顕著であった。

勘当後は特に最下級の売女が多く登場するが、もう世之介はそういう女たちに情を注ぐほどぶではない。初めの伏見のときは、一人の女性を苦界から解放してやっている。それは、初心者の出来心以外の何物でもなかったであろう。けれども、十一歳という年齢を無視していえば、世之介の行為には、不憫な社会の犠牲者をだまってみていられない正義心めいたものも認められよう。ここへきて、もはやそれはない。例えば前節でも触れたように、坂田(巻三の六)の「干瓢」の生活を「悲しく」「不便」なこととは感じて、彼女の涙に涙するほど純情な世之介ではなかったと思う。広末保氏のいうような作者の眼(『元禄文学研究』所収「好色一代男論」)が、そのまま世之介自身のものであったかどうかは疑わしい。巻三の七

でも、水戸で初挽の女に戯れ、「腹むつかしくなる」と、聞き捨てにして去ってしまうのである。

このような世之介に、彼の前半生における一つの転機ともなるべき事件が発生する。巻三の七の末尾から巻四の二までの一連の出来事がそれである。

奥州塩竈明神に來た世之介は、早速一人の巫女を見初め、夫があるのを承知で脅迫する。しかし、女が道ならぬことと激しく抵抗するところを、帰宅した夫に発見され、制裁として片小鬘を剃られる。その夜のうちに逃げ出し、不体裁な頭を隠して信濃路に入ると、自分の宿場外れに新聞が設けられている。怪しまれて塩竈の一件を白状しなければならぬはめになり、有無を言わず投獄されてしまった。ところが、そこでまた隣の房に入れられていた「やさしき女」を発見する。これも人妻であるが、夫を嫌って無断家出し、捕えられているのであった。一層興味を感じて機会を待つうち、幸い將軍家の御法事による恩赦に浴する。望みどおりうまくいきそうになったのだが、二人で駈落ちの途中、女の身内の者たちに発見され、世之介は打たれて人事不省に陥る。気がついてみると、すでに女はいない。仕方なくさまよい歩いているうちに墓場があり、二人の男が棺桶を掘り返しているのが見える。それは、髪や爪を傾城町へ売って、遊女の心中立の用に供するためであったが、ふと見ると、

その棺桶の主は、ほかならぬ「我が尋ぬる女」であった。世之介が「其時連れてのかずばさもなきを、これ皆我がなす業」と涙にくれるや、不思議なことに、女は一瞬間の眼を見開いてほほえみ、間もなくまたものとごとくなくなった。世之介もあとを追って自殺しようとするのを男たちにとめられた。以上が事件のあらましである。

そもそも人妻相手は前にすでに懲りているはずなのに、塩竈でまたぞろ手を出そうとし、つづいて信州でも同じ轍を踏んだのである。素人女の場合も、世之介には単なる遊びにすぎなかったけれども、いまここで、自分の行為が一人の女性の生命を失わせる直接の原因となったことを知ると、さすがに深く考え込まざるを得ない。まして女は恨む様子もなく、世之介の誠意を信じて笑顔で死んでいた。「二十九までの一期、何おもひ残さじ」と自害を考える世之介は、久しぶりにまともな人間の気持に立ち返っていたといえよう。しかし、それも束の間、「分別所也」と思い直す。自殺をとめた男たちから、遊里の心中立のからくりを聞かされたのが、この際有力な助言となったかもしれない。一人の女の死などに拘泥するような野暮な感情は払拭しなければ、粹への道は開かれなれないと思っただのである。

その直後は、「是からは何に成りともなれ」と、虚無的な考えにもなったけれども、やがて第二の事件が起って、さきの「分別」が

### 『好色一代男』

正しかったことを確認させられる。巻四の三、昔の念者の家を訪ねて泊めてもらった夜のことである。かつては深く情を通じながら捨ててしまった女の怨念が、異様な化物の姿を借りて襲ってくる。四人のうち一人が茶屋女であるほかは、娘・人妻、または尼僧であった人だが、いずれも世之介の裏切行為を激しい口調で詰問する。化物を退治して前後不覚に陥り、ようやく正気に返ってみると、四人の女に書かせた誓紙がずたずたに破れていたという。つまり女たちは、世之介の一時の慰みであったことに気付かず、誓紙を取り交したほどだから真実の愛情だと誤解していたまでのことにすぎない。廓の遊女の場合なら、この種の心中立は「真実に男に心をうつしてするは、十に一なり。」(『色道大鏡』巻六「心中部」)と知るべきものだ。「神おろし」の部分だけが残っていて、「仮にも書かすまい物は是ぞかし。」と思うのをみても、「反省することを知らない世之介の、ただ一度の反省の場面」(小学館『日本古典文学全集』所収「井原西鶴集・一」本章短評)ではなかるう。誓紙一枚にも拘束されねばならないのでは、命がいくつあっても足りないことを、前章に続いて、本章でもさらにはっきりとわが胸に刻み得たのであった。

世之介の好色修行の一つは、以上のように、純情や誠実さや正義心を、いわば、女を一人捨てる毎に一片ずつ失ってゆく道程である。と私は思う。その点では、阿部次郎氏の前掲「おぼえがき」に述べ

られているような説には疑問を抱かねばならない。氏は、世之介を一人の人間とみるには都合の悪い点を六つあげ、その第三に、世之介の相手に対する態度が甚だしく不安定であることを指摘している。伏見撞木町の遊女を「親里に帰して見捨てず通ふやうな、光源氏めいた情深さを持つてゐた」世之介であるのに、その後は、右の二件その他数多くの例にみられるごとく「無情」を「敢てしてゐる」という。そして、世之介を「粹人」として成熟させるためには、彼の性格にこのような「無情軽薄」があつてはならないのに、

「源氏のやうな好色のうちの情深さを、一貫して与へることに失敗した。」としている。光源氏の「情深さ」がどういふ性質のものであり、当時においてどのような意味をもつものであつたかは知らざり。しかし、王朝貴族社会における光源氏と、近世の廓で粹人にならうと修行する世之介とが、同一の物さしで計れるものかどうか。光源氏の色好みには「情深さ」が不可欠であつたかもしれないが、世之介の「粹」にはむしろ有害無益なものとしなければならぬまい。ただし、こういう断定を下す前に、「粹」とは何かという定義づけが必要になるのは当然である。だが、本来極めて野暮な人種に属する私には、実のところ、粹の境地などが簡単に理解できるわけではない。したがつて本稿は、全くあて推量にもつかなねばならないことになるのであるが、端的にいえば、矢野公和氏の要約のとおり、

廓の「恋」が多数の客を相手に成立するものである以上、「わけしり」たり得るためには、まず遊女への恋着の情を超越しなければならぬこと（『國語と国文学』昭和43年10月号「好色一代男」試論―粹を中心として―）は、常識的にもおおよそ推察がつく。同氏もまた、右の阿部説に対しては批判的立場に立っている。世之介は、後半において廓に進出してゆく前に、少なくとも廓の「恋」が「遊び」の埒外に出るべきものでないことを、明確に認識しておかねばならなかつたのである。

#### 四

以上二節にわたつて、前半部における世之介の好色修行がどういふ成果をもたらしたかをみてきた。くりかえして簡単にいえば、第一に、地方遊廓や下級売女の実態をあまねく知り尽して、一流地で一流の遊女を相手とするのでなければ満足できないことを知ると、第二に、人間としての誠実さとか情深さとかにとらわれることは、初心者のな野暮ったさに由来するのであり、これを超越してはじめて粹の世界に遊び得ることを悟ること、の二点である。もっとも、第一の点が作品の中でかなり直接的に示されているのに比し、第二の点については、世之介がそう思ったという根拠は必ずしも多くない。けれども、巻四の前記二つの事件が、世之介の色道観を定

着させる有力な契機となったことから考えても、修行の成果の一半にこの第二の点をあげてみて、不当ではなかっただろうと思う。篇中の男色関係の事項にはほとんど触れてこなかったが、それを含めたところで結論には変りがないので、省略することとした。

もちろん、これらの二つの成果が、粹人であるための十分な条件とはなり得ない。いくつかの必要条件の中の二つを満たすものには足りないであろう。資金のことは、前にもいったとおり、あまりに自明のことであるから除外するとしても、必要な条件が他にもあったはずである。いかに長年の修行を積んだといっても、まだ本格的な一流地での訓練を全く経ていない世之介であった。親の遺産が手に入ったからとて、即刻巻五の首章で、吉野太夫ほどの名妓に「わけ知りの世之介様」といわれ、二世の契りを結ぶに至るだけの条件が整っていたのかどうか、甚だ疑問とせざるを得ない。だが、前・後半を通じての一代記の性格を探ってみたいとする私の立場から解釈するならば、この一章は、作者の考案した場面転換の演出によるものであったかと思う。続く第二章以下が、再びあまり変りはないのしなない修行の継続になっていることは、すでにみたとおりである。年代の順に書くのならば、巻五はそういう話のみで占められるべきであった。吉野太夫はもっとあとでよいのである。しかし、せっかく大金を獲得し、その点では「大大大尽」といってもよい世之

介を晴れの舞台に登場させるのに、石橋をたたいて渡らせる式ではあまり平板すぎる。読者をあっといわせる効果を作者はねらったのではないか。たしかに巻五の書き出しは、野田寿雄氏のいうように、「今までの調子とはガラリと変る。豪華な緞帳がするすると上ってゆくという感じ」(三一書房刊『西鶴』)がする。西鶴が長編構成力に恵まれていなかったという見方は、この点では修正を要するであろう。要所々々に起伏を設ける小説技法には、むしろ彼独特のものを感ぜさせられるのである。

さて、後半が名妓列伝的であって、世之介の存在が稀薄であり、一代記としてみると数々の矛盾が指摘されることは、通説のとおりであろう。けれども、これもまた、解釈の仕様によっては修正の余地なしとしない。前半において好色修行が完成し、遺産を継承すると同時に粹人世之介が出現したとするならば、後半は当然「粹の実行時代」(野田寿雄、前掲書)であってよい。だが、そう思ってしまう進むと、時に粹人らしからぬ世之介の姿に逢着してうるたえねばならない。甚だしきは、大金持であるはずの世之介が、浮浪人同然に邪魔者扱いされていたりする。やっぱり後半は名妓列伝であって、世之介は傀儡化してしまっていると認めざるを得ないことになる。ところが、世之介の修行は前半部で文字どおり「完了」したのではなくて、前述のように、ある条件を満たす程度にしか成就して

いなかったとすると、どうなるか。世之介はまだ粹人とはいえないのだから、もちろん、後半に入っても修行は継続されねばならない。巻五の第二章以下が、一旦資金を得てからの補習的修行であった。巻六以後は、今度は一流遊廓を舞台に、料の達成へ向かって、実地の修練が積まれてゆく過程であると考えてみたいと思うのである。

その具体的事例はどういうことであったか。まず所々で目につくのは遊里案内記の記述である。例えば、巻六の二の前半に、大坂新町のそれ者たちが「太夫の品定め」をするところがある。これはいうまでもなく、『源氏物語』の「雨夜の品定め」にならった趣向であらうが、数名の太夫の短い批評にとどまり、後半の主役夕霧を出す導入部となっているにすぎない。しかし、世之介をこの品評の聞き役に加えているのは、『源氏』の場合と同様、まだその道にうとい世之介に対する道しるべであったと解される。事実彼は、夕霧の評判を聞いて、すぐその場を中座し、夕霧に会う準備を始める。

遊里の裏面に関する話も多い。巻六の四「寝寛の菜好み」には、遊女たちがふと見せる本性や食べ物にまつわるはしたなさなどが、いろいろと列記されている。巻七の三は、太夫の中にもこんな女が、と思わせる話である。巻七の五「諸分の日帳」には、標題の示すように、新町の太夫の日常生活が日帳の形で紹介される。これら

の話からは、上掲巻六の二の場合とは違って、世之介は必ずしも受身の教育をされるのではない。体系的にはなっていないから、これですべてというわけにはゆくまいけれど、粹人として心得ておくべき遊里の表裏を、さまざまな角度から体験的に学んでゆく「修行」の一部であったといえるであらう。末社どもの芸尽し（巻七の二）や、新町・島原の豪華な雰囲気（巻七の七）や、水揚げ風景（巻八の三）なんか紹介される。

次に、遊女評判記的な章を検討しよう。吉野太夫の巻五の一をはじめ、太夫の評判を中心とした章もかなり多い。しかし、これを単に遊女評判・名妓列伝とすると、少し違う。『色道大鏡』でいえば、「列女伝」（巻十七）にあたるのではなく、「雑談部」（巻十五）に相当するとみた方がよい。現に吉野太夫にしたところで、原拠になった話が「雑談部」に詳しく出ている。この「雑談部」は傾城の逸話を収録したもの（野間光辰『完本色道大鏡』付録「箕山」大鏡）の完本についてであるから、「二代男」の吉野以外の遊女の話も、伝記や評判というよりは、逸話を材料にして構成されたものとみるべきであらう。世之介はその相手に選ばれて、各太夫から色道のあり方をこれまた実地に「教育」され、奥儀を伝授されるのである。

ところが、これらの各章をみると、世之介が当の太夫と接して、

正則的な薰陶をうける例は、むしろ意外に少ない。一章の主題にまではなっていないものを除くと、初音(巻六の五)と高雄(巻七の四)の話くらいのものであろうか。どちらも噂にたがわず、世之介は極めて簡単に圧倒されてしまうが、ここに書かれている限りでは、初音や高雄が、特に遊女としての正道をこえた行動をとっているとは考えられない。もちろん、二つの話がたまたま闇中の秘技にわたることであつたからというのではない。

これに対して、同じ逸話に取材した話でも、他の章では、いろいろの意味で、この正道に則した行動ばかりが取られているとは思われない太夫が多く登場する。一番手の吉野太夫にしてからが、すでにそうであつただろう。吉野はある時、「小刀鍛冶の弟子」という賤業の者が自分にこがれているのを知って、ひそかに望みをかなえてやったことがある。吉野は、実はこのことのために、廓の掟に反するものとして、退廓させられている。ところが『一代男』では、揚屋から「是はあまりなる御しかた」と抗議されたにもかかわらず、世之介がかえってこれを「女郎の本意」とし、「我見捨てじと、其夜俄に揉み立て、吉野を請出し」、妻を迎えたとする。つまり、吉野太夫の常軌を外れたかのごとき行為が、逆にその名声に拍車をかけたのである。そのあとの本章主題の話をみても、決して正常な方法をもって成功を収めたとは言いがたいのではないか。身請けが

「道ならぬ事」だと、一門中から非難されているのを悲しんだ彼女が、うまく取りさばいて真価を認めさせたという。なるほど吉野は、利発人にすぐれ、諸芸諸道至らぬところなき名妓であつただろう。一門の女どもを感服させたのも無理はないが、方法そのものは、いわば一か八かを賭けた権道であつた。「権道」とは、「手段は正しくないが、目的は正道に合致すること。目的を達するために執る臨機応変の処置。方便。」(『広辞苑』)・「手段が常道に反して結果が常道に合する道。臨機応変の手段。常法を行ひにくい時に施す仕方。」(『大漢和辞典』)の意味である。吉野がここで試みた方法は正に臨機応変の手段であつたし、小刀鍛冶の徒弟との件も、太夫としての常道に反するが、結果はともに、目的をそれることはなかつた。

逸話というものは、元来がそういう事例を伝えるものであろう。格にはまった正常な行為では、逸話が逸話にならない。『一代男』のいわゆる名妓列伝が逸話を伝えるものであるとするならば、逸話の主である太夫たちが権道をゆく言動を示すのも当然だ。吉野太夫以外の例を拾ってみると、夕霧(巻六の二)・吉田(巻六の六)・高橋(巻七の一)など、いずれもそうである。夕霧は前引「品定め」で衆目の一致した名妓であつたが、世之介の「心の程を見定め」て、歳末の紋日に、彼女の機転で密会させてやる。「あるは命を捨つる

程になれば、道理を詰めて遠ざかり、名の立ちかかれば了簡してやめさせ、つれば義理をつめて見はなし、身おもふ人には世の事を異見し、女房のある男にはうらむべき程を合点させ、魚屋の長兵衛にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも言葉をよくこぼせ、……」と、男どもが語りあうその日常も、すべてがすべて正格に適うとは言いにくいであろう。吉田の逸話もまた、その機智をたたえるものであり、愛想つかしを企んだ世之介が裏をかかれて面目を失う。

「女郎の鏡」とされる高橋はどうであったか。揚屋の二階を茶席に仕立て、数々の珍奇な趣向をこらしたと、世之介が「酔のまぎれ」に与えようとした金銀を、「しとやかに打突ひ」、その場で禿に取らせたこと、その日契約したお客が来て矢の催促を受けても、世之介の許に居直っててこでも動こうとしなかったこと、以上のおよそ三つの話がここに書かれている。事の性質はそれぞれ違っていて、そのどれもが権道であることは説明を要しない。

これらの話で、世之介自身に粋人の地位が与えられている場合はほとんどない。吉田にはすっかり野暮扱ひされるし、高橋が満座の中で金を受け取らせたことについては、松田修氏の説のごとく、世之介の野暮と対比して、高橋の粋が讃美されている（『日本近世文学の成立』所収「好色一代男論」といえる。夕霧の場合も、世之介が粋人ではない。しかし、これらの例から、松田氏のように

に、世之介が「基本的には、粋においても、また、粋への成長線上においても、描かれていない」と、私は考えたくない。完成した粋人として描かれてはいないであろうが、だからこそ、「成長線上において」とらえられているのではないか。世之介は時に大恥をかきながら、名妓たちに揉まれ揉まれて成長してゆくのである。その意味でなら、同氏のいう「これら女たちの客となることによって、女たちの粋と対比されることにおいて、辛うじて粋への志向を示す」ことも首肯できる。

遊女の逸話もいろいろである。巻六の七では、伝七という男と二人、「すれ者」同士が、命がけて野秋太夫を争う。野秋も、「ゆかしさ、尤愛しさ」では甲乙つけがたい二人だけに困ってしまった、一日おきに公平に会うことにきめた。事情あって鉢合せした時は、「三人同じ枕をならべながら、下卑で首尾するわけもなく、あぢな事共ばかり」であったという。これについて、「野秋は勤めのために、両の手に花と紅葉」と非難されたのだから、やはり廓の掟に反した例である。しかし作者は、その非難に対して、「是は浅瀬をわたる人、此里の恋の淵をしらず。」と反駁している。野秋は掟に反する措置によって、かえって「淵」を知る者とされたのだ。

巻六の一の三笠は有名な奴女郎であった。世之介は幻に見るくらいに三笠を想い、三笠も世之介に異常な執心を懐いて、お客その

けで密会の機会をうかがう。親方からは度重なる折檻をうけ、ついには雪の積もる庭の柳に裸でくくりつけられるまでの仕打ちをされるが、それでも屈しない。舌かみきって死のうとするところへ、世之介も死装束でかけつけ、ようやく許されることとなったのであるが、この話にはおかしい点がいくつもある。第一に、世之介が借金も払えぬほどの貧乏な男にされていること、第二に、事實は天神であった奴風の三笠を太夫としていること、第三には、世之介が三笠の間夫として扱われ、両者の間の真実をこめた心の触れ合いが強調されていること、などである。

しかし、これらの疑問点に対しても、私流の解釈を試みるならば、解答はさほどむづかしくはない。第一の点が、世之介がすでに大金持であるはずの構想と矛盾することは指摘するまでもないが、この章は奴三笠の心意気を物語る話なのだから、恋人となる男は当然貧窮状態におかれねばふさわしくない（前掲、堤精二「好色一代男」と「諸艶大鑑」）といえるだろう。ただしそれは、本書の長編の性格の破綻を証明する事例に使用されるべきことではない。「世之介」を個人と考えるとそういうことになるが、「浮世之介」と解するならば、疑問は直ちに解消する。いうまでもなく、権道によった色道修行の一環である。第二の疑問点の奴風に関しては、度々ながら、「色道大鏡」を参照すると、巻四「寛文式・下」に、「はずみ

たる事ばかりをすく世にしあれば、かかる風情もなくてやはあるべき。しかりといへども、太夫職のもちゆべき風儀にあらず、天職より以下の業なるべし。」とある。著者箕山は、奴風に對してかなり批判的な見方をしていたことがうかがえるように思う。ところが西鶴は、「太夫職のもちゆべき風儀にあらず」といわれているにもかかわらず、事實は天神の位にあった三笠をわざと太夫に仕立て、しかも、持前の奴風の気性を遺憾なく發揮させた。箕山はまた、「いかに人のおもしろがればとて、傾城の格をはずすは狂人に似たり。」と戒めている。元來奴風が「格」を外れ「狂」に傾く危険性をはらんでいたことが推察できるが、ここに描かれた三笠は、あるいは狂人に近いかもしれない。狂人すれすれの線まで奴風に徹したかにみえる。三笠がもし太夫であるならば、なおのこと行き過ぎていたであろう。作者はおそらく、こういうことを計算に入れた上で、奴三笠の「権」の眞価を一層強く浮かびあがらせるために、天神の彼女を太夫にしたのではあるまいか。すなわち、第二の疑問点についても、世之介が三笠の権道による教育を受けたということ、おおよその説明がつくのではないかと思う。次に第三の点であるが、この点を疑問とする前提として、客と遊女がお互いに眞情を抱きあう関係が、廓における粹の世界で容認されるものであるかどうかを、まず確かめておかねばならない。

この問題になると、再び筆者自身の無粋さを嘆かねばならないが、ここではとりあえず、前節の末尾で述べたところに従い、「否」の回答を出しておくこととする。もっとも、同類の話は他の章にも見えないではない。巻七の六の吾妻は、「勤めの外は、忘れても人に手を握らせず」、「うろたへても手くだ男はよもやあるまじき」と思われていたのに、「二とせあまり、世之介と浅からぬ」仲であった。また、巻六の三には藤浪との話がある。世之介がある日、なじみの太鼓持夫婦を自宅に招いて、標題の「心中箱」を披露する。長年の間に蓄えられた無数の心中立の品々を見ているうちに、床の上にあったかもしが突然躍り出してびっくりする。世之介に尋ねてみると、藤浪から貰ったかもしであった。藤浪との間は、「或時は夢、或時はまぼろし、又は現に目見えて、今請けられてゐる男の首尾かたる。更にあはぬとおもはず。人には咄されぬ事までもありて」という状態である。殊に昨夜は、女が縞縮緬一巻を羽織用にと置いて帰った。夢なのに、現物がここにあるのが不思議だという。調べてみると、藤浪の方でも、たしかにその縮緬がなくなつて探しているところだった……。

もちろんこれは、執心の深さを表現するための一つの虚構である。前半巻四の三に、やはり心中立に関する怪異現象が書かれた以外、『一代男』では他に例がないが、『諸艶大鑑』になると、この方

法が多く見られることは、陣岐康隆氏の『西鶴・評論と研究』などにもいわれているとおりである。『一代男』よりも遊里の現実を深く掘り下げたとされる『諸艶大鑑』に、全般的にみて、客と遊女の真剣な情が多く取り上げられていることは、これが遊里の一つの現実であったことを示すものに他なるまい。だがそれは、多く怪異を伴う。ということは、男女間の真情がそれだけ厚く深かつたことのアかしにもなるが、同時に、遊里において現実に容認され、祝福される可能性が極めて稀薄であったことを物語りはしないか。上記二例はこれを裏書きする。藤浪は、右のことがあつてから、「今請けられてゐる男」との生活を絶つて出家した。吾妻も他の男に請け出されて「活計歓楽の暮し」をしていたが、「是をうれしくはおもはず」、一方でその男の恩誼を感じつつも、「世之介と申しかはせし事を忘れず」に、命の短かからんことを願い、「湯水もたつて」「空しく」なつたという。ともに、遊女としての最大の生甲斐を世之介との愛情に求め、万金を投じて請け出してくれた男をかえりみず、永遠の誓いに殉じようとした例である。藤浪や吾妻がそれほどまでに貴重なものと考えたこの種の真情が、廓の掟の中で、そう易々と実現し得たとは思われない。実現し得ても、少なくとも「正」の地位を主張することはまず困難であらう。

三笠の話に戻る。彼女は、世之介との仲をとがめられていかに折

檻されても、「あふまじきとはいはず、死ぬるをきはめ」る。血書を托して舌かみ切ろうとするあたりは、いささか狂言めくふしがないではないが、身命を投げ出してでもと思う情は前の二人とかわらない。そうすることによってようやく目的を達し得たのであるから、三笠自身にとって、これはまさに権道そのものであった。世之介の側からすれば、こういう三笠によって権道の修行を積んだのである。このようにみれば、さきにあげた三笠の話に関する第三の疑問点もまた、世之介一代記の軌道にのせて解明できると思われるが、いかがであろうか。

## 五

本稿は、もと、主として『一代男』後半部における一代記の性格をみることを目的に書き始めたが、前半部に紙数を費しすぎ、肝心のところで舌足らずになってしまった。各章の隅々にまで及ぶ余裕もなかったのだが、終わりに巻八の諸章を取り上げ、一応のまとめをつけておくこととしたい。

第二章「情のかけろく」は吉原の小紫の話。太夫の逸話を主要素材とするものとしては、これが最後である。少し知能の低い京の十蔵という男が、初対面から小紫に振られない自信があると広言し、監視人付きで江戸に下らされて、成るか成らぬか実地に験されるこ

とになった。もし賭けに負けると、十蔵には取り返しのつかぬ罰が課せられる。しかし、さすがは小紫、すっかり事情を見抜き、申し出どおり十蔵に首尾させてやった、という話である。小紫はもちろん、十蔵などに好意を抱いたのではない。望みをかなえてやったのは、専ら、「すこしたらぬ人を賭にして遣はしけると、さながら見えますよ、先さまの人、憎さもにくし」との理由からであった。賭けをいどんだ「去る御方」、すなわち小紫のいう「先さま」は京の大尽らしいが、ひまにあかし「銀つかうて慰みに」馬鹿なことを考えた。小紫ならずとも、憤慨するのは当然である。こんなのが万一人として通るならば、粋の道も地に墜ちたといわねばならない。もとより、正道でもなければ権道でもない。強いていえば邪道であろう。小紫はきっぱりと拒絶反応を示した。出発直前の十蔵の深刻な表情を、「見るに笑しく」、「是は一興あり。」と、弥次馬気分で江戸まで同行した世之介もどうかしている。十蔵のあと、「色々どきても」、ついに小紫が会おうとしなかったのは、邪道に對するきびしい批判であつただろう。これもまた、世之介が教育をうけた話である。

前節来みてきたように、世之介は後半部においても、さまざまに「修行」を続ける。巻四までの諸国遍歴による修行が、仮にある成果を収め得ていたとしても、それがそのまま、太夫を相手とする世

界に十分な成果であったとは言いがたい。父親の死によって、資金の面では大尽たる資格を獲得したけれども、本場の粹に関しては、まだ無知同然の世之介であった。作者は、引き続き彼に修行の場を提供しなければならぬ。巻五の地方めぐりもそうであったし、巻六以後もそうである。特に名妓列伝的であるといわれる各章では、太夫の逸話を紹介するかたちの中で、おのずから粹人としての完成をめざした修行をさせているのである。その間に、即物的な各種の知識を吸収させることも、むろん必要であった。こういう意味で、作者は、『一代男』のいわゆる後半の部分をも、前半同様、世之介の色道修行一代記として書き続けた、少なくともその意図は認め得るのではないかと私は思う。

しかし、粹の世界は広くかつ深い。教科書ふうに一課から筋道を立てて学び得るものではあるまい。したがって、前半でもそうであるが、後半ではなおさら、各章の排列が修行順序としての必然性をもっているとはいえないであろう。目録の年立が、特に後半では意味がなくなっているといわれるゆえんである。だが、全く無秩序な排列かといえば、おそろくそうでもあるまい。巻五の一、吉野太夫の話に関しては前に考えてみた。同様のことが他の章についてもみられ、作者の構成上の配慮が発見できるかと思うが、主観的な結果論に陥るおそれを伴うので、一々については触れなくておく。た

だ、比較的客観的に認め得ると思うのは、老齢に達した後の世之介の遊び方に、一つの変化が現れていることであろう。それは、阿部次郎氏の指摘(前掲書)のとおり、世之介がみずから楽しむよりも、周囲を楽しませることを楽しむ境地に達していることである。早く巻五の二の、禿たちの所望をきいてやる衆などがあるにはあるが、後半も終わり近く、巻八になると急に目立ってくる。末社連中に、贅を尽した石清水詣でをさせてやる話(第一章)、大坂からの来客を島原へ案内してやる話(第三章)、長崎丸山で、持参した太夫の衣裳人形を並べて見せてやる話(第四章)、などがそれである。世之介一代記としてみるならば、こういうことも修行の最終課程として必要であったといえるだろう。長い修行もようやく大詰めの段階に到達した。

かくして、物語はいよいよ最終章、巻八の五「床の賣道具」につながる。いうまでもなく、この作品をしめくくる大事な一章である。女護の島渡りの解釈をめぐって、諸説さまざま行われ、いまだ定まるところがない。詳しくは小稿の余白をもって論じ得る問題ではないので、ここには、本書を上上の一代記的性格に主点をおいてみてきた立場から、簡単に私見を付加するにとどめる。

独断牽強のそりをかえりみずにいえば、作者はここで、粹人たるべき一通りの修行を完成し、ある種の悟道に到達したものと

て、世之介の心境を描いているのではないか。「広き世界の遊女町残らず詠めめぐりて、身はいつとなく恋にやつれ、ふつと浮世に今といふ今ころのこらず。」「情念ん見るに、いつまで色道の中有に迷ひ、火宅の内やけとまる事をしらず、すでにはや、くる年は本卦にかへる。」「うつれば替つた事も、何か此うへに有るべし。」というのがその心境であった。もっとも、「今まで願へる種もなく、死んだら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入り難し。あさましき身の行末、是から何になりとも成るべし。」と思つたことは以前にもあつた。卷二の六、勘当された直後と、卷四の三、例の牢中で知り合つた女を失つた時とに、心をよぎつたこともほほこつたことである。前の二回は、どちらも世之介の前半世における岐路であつた。今回は最後の心の決着をつけねばならない地点に立たされている。しかし前二回と違って、今度は「浮世の遊君、白拍子、戯女、見のこせし事もなし。」「ここに懸る山もなければ」と、生涯を賭けたはずの色道成就の悲願を達成したことに満足している心境である。女護の島なる所がどこであるにせよ、いずれは「風にまかせ」て「行方しれず」になつてしまふのである。宗教的な「有難き道」ではなくても、いわば来世の世界であらう。いま、現世を清算し、みづから求めて来世へ船出しようとする世之介が、何を考へていたか。肯定的にも否定的にも、いろいろに解釈

### 『好色一代男』

されているけれども、「今といふ今ころのこらず」、「何か此うへには有るべし」とする満足感だけは、とにもかくにも認め得るのではないかと思う。余事は知らず、少なくとも色道そのものに関して、粹を極め得たという、一つの悟りの境地に達していたといえるであらう。それはある意味で「初心」に帰ることもあつた。

『色道大鏡』卷五「廿八品」、これは、『法華経』二十八品に擬して、著者が野暮から粹に至る過程を説いたものであるが、野間光辰氏は、世之介の色道修行をこれにあてはめてみる事ができるだろうといわれている。「当道残るくまなくきはめつくして」（第廿六「極尽品」）、「不可思議の大徳」（第廿七「明了品」）に達した人の心境が、第廿八「大極品」（「空色相」・「無心相」）に示される。「大極品」は、円を描いて上辺外周に「大極」と記すほかは、一切の説明を省き、道歌二首をもつてこれに代える。

#### 空色相

春かせのふきをさまりておぼろ夜のふけておとなき波のうなばら

#### 無心相

しるらめやつむとし月の老を経てむかしに帰る身のおろかさを

（一九七三・九・三〇）